

Yushi Nomura, (野村祐之), Desert Wisdom

—Sayings from the Desert Fathers, Doubleday & Company,
Garden City, New York, 1982, 109 pp. —

竹 中 正 夫

この書物は三つの点できわめて異色の本である。一つは、4世紀ならびに5世紀のエジプトの砂漠の修道士たちのことばを、原典にあたって、現代人にわかりやすい形で紹介したことである。このため、著書は J. P. Migne の *Patrologia Latina*, volume 73 (Paris 1849) と *Patrologia Graeca*, volume 65 (Paris, 1858) の資料を用い、出来るだけ平易に、素朴な原意を表現しようとしている。4世紀のはじめに、教会が国家から認められるにつれて、教会が形体をととのえてゆくにしたがって、その内的精神を稀薄にしていった。迫害の時代が終り、はりつめた緊張がゆるみ、教会はなまぬるいこの世の温床に安住していった。こうした中で、少数の霊的にめざめた教父たち (Abbas) や教母たち (Ammas) は、人々がひしめき、権力がうごめいている文明の世界を去って、エジプトの荒野に赴いた。彼らにとって荒野は二つの意味をもっていた。砂漠は悪魔とたたかう荒野であったが、同時に神と出会う素朴なめぐみの園であった。現代の都市文明の荒廃、人心を忙殺するようなけたたましいテンポ、そして容赦なく人をうちひしいでゆく巨大な権力のわだち、さらに宗教集団自体その中に埋没しがちな危険性を覚えるとき、4、5世紀のエジプトの荒野の修道士たちのことばは、荒れすさむ心に一涼の清風に接するおもいがする。砂漠に赴いた修道士たちは、決して砂漠に逃れたわけではなかった。荒野は、悪魔と出会う場所であった。彼らは、都市を徘徊めき歩いた悪魔は、砂漠に帰ってくるものと信じていた。だから砂漠で、全教会に代って、そして全教会のために悪魔とたたかうことに意味を見出していた。現に、都会から遙か離れた荒野で素朴な生活をして

いた修道士たちのところに、多くの教職や信徒たちが来て、道をたずね、助言を求めた。また、修道士たちも、荒野での生活を自分の救いのためと考えずに、旅人をもてなし、近隣の人びとに仕えるようにつとめた。ここには95編の小説話がおさめられている。なかには、短い語録もあるし、小さな物語りもあるが、何れも、修道士たちの体験から出て来た玉のようなことばである。おそらく修道士たちにとって、最も困難な修行は、自己とのたたかいであったにちがいない。いかに自分を捨てるかということ、どこまで謙虚に神と人とに仕えることが出来るかということが彼らの中心的な課題であったことがこれらの説話は示している。

本書の第二の特色は、本書の成立のプロセスにある。著者の野村祐之氏は青山学院で神学を学んだ。1972年世界教会協議会(WCC)が「現代における救い」(Salvation Today)をテーマとしてバンコックで開いた会議に出席し、エキュメニカル運動にふれ、WCCのコミュニケーションの部門の責任者であるジョン・テラー氏の助手としてジュネーブで数年間働いた。ことにナイロビにおける第5回のWCCの大会で報道展示の部門で貢献した。そののちイエール大学神学部で学び、修士の学位をとって昨年帰国した。イエール在学中に野村祐之氏が出あった教師にヘンリー・ナーウエン(Henri J. M. Nouwen)という人がいた。彼はオランダ出身のカトリックの神父で、「砂漠の霊性と現代の聖務」(Desert Spirituality and Contemporary Ministry)というクラスを設けていた。このコースは当時学生たちの間できわめて人気のあったコースであった。ここで、ナーウエン教授を通して、4、5世紀の東方教会の荒野における霊性の体験から生れた説話に著者の心はとらえられ、それを理解するとともに、あわただしい生活をしている現代人にその意味を伝えるようにつとめた。野村さんはその前後、ニューヨークの東ハレム(East Harlem)やニューヘーブンの町中の小さな交り(Soup Kitchen)などで働き、遠い昔のエジプトの砂漠のことばを、現代のスラムの人たちとの生活のなかでかみしめる経験をもった。序文を寄せているヘンリー・ナーウエン氏は、程なくして、イエール大学教授の地位に別れをつけて、遠く南米のペルーのリマの郊外にある貧しい

人々の地域に住んで、民衆とともに学びつつ働いている。砂漠に来た教父の一人に、「ギリシャ語もラテン語も出来、すぐれた学識をもったあなたの様な人が、何故無学の農民に学ぶのですか」ときかれたとき、「たしかにわたしは、ギリシャ語やラテン語を学びましたが、この農民たちのアルファベットさえわからないのです」(23ページ)と答えたという物語は、遠い昔の話ではない。わたしは、1973年イエール大学の客員教授として、ニューヘーブンに半年いたが、イエールの神学部で一番人気のあったクラスは、ヘンリーのクラスであった。それは講義というより霊性を涵養する修練グループといった方がよかった。あまり受講生が多いので、25人位を一つのグループとして5つか6つのグループに分けて担当していた。都会のさわがしい生活で霊性に餓えた現代人が、彼の指導の下に砂漠の知恵を修練していた。

第三に本書の特色は、その表現形式にある。いまから1,500年前の砂漠の物語りが現代のことばに訳出されているのみでなく、野村君の筆による墨絵で表現されており、きわめてユニークな作品集となっている。面白いことには、著者は、一つ一つの物語を簡素な白墨の筆墨であらわすのみでなく、登場人物の姿や周囲の風物を、日本的なものとした。あたかも、日本の禅宗の修道僧が深山にこもって修行しているような感じが出ており、ユーモアをもってそれらの物語りを理解する助けを提供していた。古今、東西における霊性の陶養に一つの清風を投げかけている書物であると思った。昨年(1983年)本書の独訳が出版された。Yushi Nomura, *Vom Anzünden des Göttlichen Feuers*, Herder Freiburg, Basel・Wien, 1983 邦訳がなされることをのぞんでやまない。